第4講 古文

歴史的仮名遣い／係り結び（こそ〜已然形）／主語／古語の意味／古典の文学史（作品・作者・時代・ジャンル）

要点の確認 10分 | 例題 15分 | 練習（本文1題） 40分 | 確認テスト 10分

要点1　歴史的仮名遣いと係り結び（入試でよく出る）

一　**歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す**　入試では毎年二〜三問。「すべてひらがなで」なら漢字も残さない。

①語の頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「わ・い・う・え・お」　例　いふ→いう　思ひ→おもい　まへ→まえ　②「ゐ・ゑ・を」→「い・え・お」　例　ゐる→いる　こゑ→こえ　をとこ→おとこ　③「ぢ・づ」→「じ・ず」　例　はぢ→はじ　よろづ→よろず　④「あう・いう・えう」と読む音→「おう・ゆう・よう」　例　やう→よう　うつくしう→うつくしゅう　けふ→きょう　⑤「くわ・ぐわ」→「か・が」　例　くわし→かし（菓子）　⑥「〜しょう・〜だろう」の「む」→「ん」　例　行かむ→いかん

※語の頭の「は・ひ・ふ・へ・ほ」（はな・ひと）と、助詞の「は・へ・を」はそのまま。決まりを二つ使う語（思ふやう→おもうよう）に気をつける。

二　**係り結び**　文の中に**係りの助詞**「ぞ・なむ・や・か・こそ」があると、文の終わり（**結び**）の形が変わる。「ぞ・なむ・や・か」は**連体形**、「こそ」は**已然形**で結ぶ。

三　**入試の答え方**　「係りの助詞、結びの一語を抜き出しなさい」→係りは「こそ」「ぞ」などの助詞、結びは**文末の一語**（「言ひける」なら「ける」）。**入試では毎年「こそ〜已然形」が出る。**本文の「こそ」をすべて〇で囲み、そこから「。」や「と」の前の文末を見る。「〜にこそ。」と文が切れているときは、結びの「あらめ」などが省かれている（結びの省略）。

係りの助詞	意味	結びの形	例（けり）
（ふつうの文）	—	終止形	花咲きけり。
ぞ・なむ	強める	連体形	花ぞ咲きける。
や・か	疑問・反語	連体形	花や咲きける。
こそ	強める	**已然形**	花こそ咲き**けれ**。

終止形	けり	き	なり	あり	す	多し
連体形	ける	し	なる	ある	する	多き
已然形	けれ	しか	なれ	あれ	すれ	多けれ

問一　次の（1）〜（4）を現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで書きなさい。

（1）にほひ　［　　］　（2）ゐなか　［　　］　（3）まうす　［　　］　（4）言はむ　［　　］

問二　「名をば、さぬきのみやつことなむ言ひ［　　］。」の［　　］に入る形を選びなさい。　ア　けり　イ　ける　ウ　けれ　［　　］

問三　「あやしうこそものぐるほしけれ。」（徒然草）から、係りの助詞と結びの一語を抜き出しなさい。

係り［　　］　結び［　　］

要点2　主語の見つけ方・古語の意味・古典の文学史

作品	ジャンル	時代	作者
竹取物語	物語	平安	不明
伊勢物語	歌物語	平安	不明
土佐日記	日記	平安	紀貫之
枕草子	**随筆**	平安	清少納言
源氏物語	物語	平安	紫式部
今昔物語集	**説話集**	平安の終わり	不明
方丈記	**随筆**	鎌倉	鴨長明
宇治拾遺物語	**説話集**	鎌倉	不明
平家物語	軍記物語	鎌倉	不明
徒然草	**随筆**	鎌倉の終わり	兼好法師
伊曽保物語	仮名草子	江戸の初め	不明
おくのほそ道	紀行文	江戸	松尾芭蕉

一　**主語（だれが）を見つける**　①登場人物に○をつけ、だれの動作かを本文の横に書きこむ。②「～て」でつながる動作は、**同じ人**のことが多い。③「～ば」「～に」「～を」「～ど」のあとは、**主語が変わる**ことが多い。④会話文（「　」）の話し手は、「と言ひて」「と申しければ」の主語。⑤「給ふ」「おはします」などの敬語は、身分の高い人や、話し手が持ち上げている人の動作につく。

二　**意味をまちがえやすい古語**　いと（とても）　あはれなり（しみじみと心が動く・かわいそうだ）　をかし（趣がある）　わろし（よくない）　ゆゆし（すばらしい・おそろしい）　ありがたし（めったにない）　あさまし（驚きあきれる）　やがて（すぐに）　うつくし（かわいらしい）　おどろく（目をさます・はっと気づく）　よし（こと・わけ）　年ごろ（長年）　日ごろ（ふだん）　～まほし（～したい）　～べからず（～してはいけない）

三　**古典の文学史**　入試では「作品のジャンル」「成立した時代」「作者」が出る。三大随筆は『枕草子』『方丈記』『徒然草』。

※鎌倉時代の説話集には『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』もある。『竹取物語』は、いちばん古い物語。『伊曽保物語』はイソップ物語を日本語に訳したもの。

問一　次のア～カのうち、随筆を三つ選び、記号で答えなさい。

ア　枕草子　　イ　平家物語　　ウ　方丈記　　エ　源氏物語　　オ　徒然草　　カ　今昔物語集

問二　鎌倉時代に成立した説話集を一つ選び、記号で答えなさい。　ア　竹取物語　　イ　宇治拾遺物語　　ウ　今昔物語集　　エ　おくのほそ道

問三　古語とその意味の組み合わせとして正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　いと＝少しだけ　　イ　ありがたし＝感謝したい　　ウ　あさまし＝驚きあきれる　　エ　やがて＝しばらくして

例題　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

公世(きんよ)の二位のせうと（兄）に、良覚(りやうかく)僧正と聞こえしは、極めて腹あしき（怒りっぽい）人なりけり。坊（僧の住まい）の傍らに、大きなる榎(え)の木のありければ、人、「榎木僧正(えのきのそうじやう)」とぞ言ひける。「この名、②しかるべからず。」とて、①かの木を切られにけり。その根のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひ（切り株）を掘り捨てたりければ、その跡、大きなる堀（水のたまった穴）にてありければ、「堀池僧正(ほりけのそうじやう)」とぞ言ひける。

（『徒然草』による）

例題の問いと解き方

問い　（1）「せうと」を現代仮名遣いに改めなさい。（2）――線部①の主語は、ア　公世の二位　イ　良覚僧正　ウ　人　のどれか。（3）本文中の係り結びを二つ探し、係りの助詞と結びの一語を答えなさい。

解き方　（1）「せう」は「えう」と読む音→「よう」の決まりで「しょう」。（2）「～とて」の前の「この名、しかるべからず」は、あだ名をいやがる人の心の中のことば。そう思って木を切ったのは良覚僧正。「切られ」の「られ」は敬語で、僧正を高めている。（3）本文の「ぞ」「こそ」を○で囲む。「とぞ言ひける」が二か所あり、「ぞ」の結びは連体形の「ける」。**答え**　（1）しょうと　（2）イ　（3）ぞ・ける（「榎木僧正」とぞ言ひける）、ぞ・ける（「堀池僧正」とぞ言ひける）

問一　人々が最後につけた良覚僧正のあだ名を、本文中から四字で抜き出しなさい。

問二　良覚僧正のあだ名が次々に変わったのはなぜですか。最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　僧正が、自分で気に入った名前を次々に考えたから。　イ　人々が、僧正をうやまって、りっぱな名前に変えたから。

ウ　僧正が、あだ名のもとを取りのぞくたびに、そのあとに残ったものから新しいあだ名がついたから。　エ　僧正が住まいを移るたびに、近くの木や池の名前で呼ばれたから。

問三　――線部②「しかるべからず」の意味として最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ふさわしくない　イ　覚えにくい　ウ　もっと広めるべきだ　エ　しかたがない

練習　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（入試の形）

あるとき、狐、㋐ゐじき（えさ）をもとめかねて、ここかしこさまよふところに、烏、ししむら（肉のかたまり）を㋑くはへて、木の上に居れり（とまっていた）。狐、心に㋒思ふやう、我このししむらをとらまほしく覚えて、烏の居ける木の本に①立ち寄り、「いかに②御辺、御身は万の鳥の中に、すぐれてうつくしく見えさせおはします（お見えになります）。然りといへども、少しことたり給はぬ（足りない）こととては、御こゑのはなごゑにこそ侍れ（ございます）。ただし、このほど世上に申しは（世間でうわさしているのは）、御こゑもことのほかよくわたらせ給ふ（よくていらっしゃる）など申してこそ候へ。あはれ、一ふし③きかまほしうこそ侍れ。」と申しければ、烏、この儀（話）を実とや④心得て、「さらば、こゑを出さん。」とて、口をはだける（大きく開けた）ひまに、つひにししむらを落としぬ。狐これを取りて逃げ失せぬ。そのごとく、人いかにほむるといふとも、⑤いささか誠と思ふべからず。

（『伊曽保物語』による）

問一　二重傍線部㋐～㋒をそれぞれすべてひらがなにし、現代仮名遣いに改めなさい。

㋐［　　］　㋑［　　］　㋒［　　］

問二　――線部①「立ち寄り」・④「心得て」の主語として最も適当なものを、それぞれ次のア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　狐　　イ　烏　　ウ　世間の人　　エ　筆者

①［　　］　④［　　］

問三　――線部②「御辺」・③「きかまほしう」の本文中での意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

②　ア　あなた　　イ　このあたり　　ウ　わたし　　エ　森の王　［　　］

③　ア　聞かせたく　　イ　聞きたくなく　　ウ　聞いてみたく　　エ　聞きのがして　［　　］

問四　狐の言葉のうち、世間の人が烏の声についてうわさしている内容が書かれた部分を本文中から抜き出し、その最初と最後の三字を答えなさい。（　）の注はふくめない）

最初［　　］～最後［　　］

問五　本文中から係り結びを三つ探し、係りの助詞と結びの一語を、それぞれ抜き出しなさい。

一つ目　係り［　　］結び［　　］

二つ目　係り［　　］結び［　　］

三つ目　係り［　　］結び［　　］

問六　烏が口を開けたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　狐を大声でおどかして、追いはらおうとしたから。　イ　狐のほめ言葉を本当だと思い、よい声を聞かせようとしたから。

ウ　くわえていた肉が大きすぎて、口がつかれたから。　エ　鼻声だと言われたのがくやしく、言い返そうとしたから。［　　］

問七　――線部⑤「いささか誠と思ふべからず」の意味として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　少しも本当だと思ってはいけない　イ　少しは本当だと思ってもよい

ウ　本当かどうか、少し考えてから答えるべきだ　エ　心から信じれば、いつかは本当になる［　　］

問八　狐が烏を「すぐれてうつくしく見えさせおはします」などとほめたのは何のためですか。十五字以内で説明しなさい。

［　　］

問九　『伊曽保物語』は、江戸時代の初めに出版された、イソップ物語を日本語に訳した作品です。同じ江戸時代に成立した作品として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　『徒然草』　イ　『平家物語』　ウ　『おくのほそ道』　エ　『竹取物語』［　　］

確認テスト（10分・100点）　次の問いに答えなさい。

問一　次の（1）～（4）を現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで書きなさい。（各5点）

（1）こゑ　［　　］　（2）つはもの　［　　］　（3）やうやう　［　　］　（4）いはく　［　　］

問二　（　）の語を、係り結びに合う形に直しなさい。（（1）（2）各6点、（3）8点）　（1）「堀池僧正」とぞ言ひ（けり）。　［　　］

（2）御こゑのはなごゑにこそ（侍り）。　［　　］　（3）散りしをれたる庭などこそ見どころ（多し）。　［　　］

問三　練習の本文「と申しければ、烏、この儀を……」の「申し」の主語を選びなさい。（10点）　ア　狐　イ　烏　ウ　世間の人　［　　］

問四　「年ごろ」の意味を一つ選びなさい。（10点）　ア　長年　イ　年をとった人　ウ　一年あと　エ　年の初め　［　　］

問五　次の作品の作者を、ア～エから一つずつ選びなさい。（各5点）

ア　清少納言　イ　兼好法師　ウ　紫式部　エ　鴨長明　（1）徒然草　［　　］　（2）方丈記　［　　］

問六　次のア～ウの作品を、成立した時代の古い順に並べかえ、記号で答えなさい。（10点）　ア　徒然草　イ　竹取物語　ウ　おくのほそ道　［　　］

［　　］

［　　］

問七　説話集を二つ選びなさい。（各5点）　ア　今昔物語集　イ　方丈記　ウ　宇治拾遺物語　エ　平家物語　オ　土佐日記　［　　］　［　　］

問八　係り結びの使い方が正しい文を選びなさい。（10点）　ア　月こそ見えけり。　イ　声ぞ聞こえける。　ウ　花こそ散りける。　エ　人ぞ多かりけれ。　［　　］

入試にチャレンジ　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

筑紫に、なにがしの押領使（地方の役人）などいふやうなる者のありけるが、土大根（大根）を、よろづにいみじき（すばらしい）薬とて、朝ごとに二つづつ①焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時、館（屋敷）の内に、人もなかりける隙（すき）をはかりて、敵襲ひ来たりて、囲み責めけるに、館の内に、兵二人出で来て、命を惜しまず戦ひて、みな追ひ返してげり。いと不思議に覚えて、「日ごろここにものし給ふ（いらっしゃる）とも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ。」と②問ひければ、「年ごろ頼みて、朝な朝な召しつる（召し上がった）土大根らに候ふ。」と③言ひて失せにけり。深く信をいたしぬれば（心から信じていれば）、④かかる徳もありけるにこそ。

（『徒然草』による）

問一　――線部①「焼きて食ひける」・②「問ひければ」・③「言ひて」の主語を、ア～ウから一つずつ選びなさい。（同じ記号を使ってもよい）

ア　押領使　　イ　敵　　ウ　兵二人

①［　　］　②［　　］　③［　　］

問二　――線部④「かかる徳」とは、どのようなことですか。三十字以内で説明しなさい。

問三　最後の一文の「こそ」の結びは省かれています。省かれている語を選びなさい。　ア　あり　　イ　ある　　ウ　あらめ　　エ　あらむ　［　　］

問四　本文の内容として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　押領使は、兵二人の正体が大根だと前から知っていた。

イ　敵は、館に家来が大勢いるときをねらって攻めてきた。

ウ　大根の力を深く信じて食べ続けたことが、思いがけない助けになった。

エ　兵二人は、押領使からほうびを受け取って去っていった。　［　　］

問五　この作品と同じジャンルの作品を、次のア～エからすべて選び、記号で答えなさい。

ア　『枕草子』　　イ　『平家物語』　　ウ　『方丈記』　　エ　『宇治拾遺物語』

［　　］
［　　］

解答（答えと短い解き方）

第4講　古文

要点1の確かめ

問一　（1）におい　（2）いなか　（3）もうす　（4）いわん

（1）語の頭以外の「ほ」「ひ」→「お」「い」。（2）「ゐ」→「い」。（3）「まう」→「もう」。（4）「は」→「わ」、「む」→「ん」。

問二　イ

係りの助詞「なむ」があるので、文末は連体形「ける」で結ぶ。

問三　係り　こそ　結び　ものぐるほしけれ

「こそ」があるので文末は已然形。「ものぐるほしけれ」で形容詞の一語。「けれ」だけを抜き出さない。

要点2の確かめ

問一　ア・ウ・オ

三大随筆は『枕草子』（清少納言）、『方丈記』（鴨長明）、『徒然草』（兼好法師）。

問二　イ

『宇治拾遺物語』は鎌倉時代の説話集。『今昔物語集』は平安時代の終わり。ジャンルと時代の両方を確かめる。

問三　ウ

「あさまし」は、思いもよらないことに驚きあきれる気持ち。

例題の確かめ

問一　堀池僧正

あだ名は「榎木僧正」→「きりくひの僧正」→「堀池僧正」の順に変わった。

問二　ウ

あだ名をいやがって、もとのものを取りのぞくたびに、かえって新しいあだ名がついてしまう。

問三　ア

「しかるべし」は「ふさわしい」、「べからず」はその打ち消しで「ふさわしくない・よくない」。

練習　古文（入試の形）

問一 ㋐えじき　㋑くわえて　㋒おもうよう

㋐「ゑ」→「え」。㋑語の頭以外の「は」→「わ」、「へ」→「え」。㋒「ふ」→「う」、「やう」→「よう」の二つを使う。

問二 ①ア　④イ

①「〜て」でつながる狐の動作。④「と申しければ」の「〜ば」のあとで主語が烏に変わる。

問三 ②ア　③ウ

②「御辺」は話している相手を呼ぶことば（あなた）。③「まほし」は「〜したい」で、「聞きたく」。

問四 （最初）御こゑ　〜　（最後）せ給ふ

「世上に申しは」のあとがうわさの内容。そのあとの「など申してこそ候へ」はうわさの中身ではない。

問五 こそ・侍れ　／　こそ・候へ　／　こそ・侍れ　（本文に出てくる順）

「こそ」を○で囲むと三つ。どれも文末が已然形。「実とや心得て」の「や」は結びがない（結びの消滅）。

問六 イ

「この儀を実とや心得て」「さらば、こゑを出さん」。声がよいとうわさされていると聞き、歌ってみせようとした。

問七 ア

「いささか」は打ち消しと組むと「少しも（〜ない）」。「べからず」は「〜してはいけない」。

問八 （例）烏がくわえている肉を取るため。（十五字）

「このししむらをとらまほしく覚えて」とある。採点の要素：①烏の（くわえている）肉を　②取るため。

問九 ウ

『おくのほそ道』は江戸時代の紀行文（松尾芭蕉）。

確認テスト

問一 （1）こえ　（2）つわもの　（3）ようよう　（4）いわく　（各5点）

（1）「ゑ」→「え」。（2）（4）語の頭以外の「は」→「わ」。（3）「やう」→「よう」を二回。

問二 （1）ける　（2）侍れ　（3）多けれ　（（1）（2）各6点、（3）8点）

（1）「ぞ」は連体形で結ぶ。（2）（3）「こそ」は已然形で結ぶ。「多かれ」は命令形なのでまちがい。

問三 ア　（10点）

「と申しければ」の前の会話文（「いかに御辺、……こそ侍れ。」）を話したのは狐。「〜ければ」のあとで主語が烏に変わる。

問四　ア　（10点）

「年ごろ」は「長年・何年もの間」。今の「年ごろ」の意味ではない。

問五　（1）イ　（2）エ　（各5点）

『徒然草』は兼好法師、『方丈記』は鴨長明。どちらも鎌倉時代の随筆。

問六　イ→ア→ウ　（10点）

『竹取物語』（平安時代）→『徒然草』（鎌倉時代の終わり）→『おくのほそ道』（江戸時代）。

問七　ア・ウ　（各5点）

『今昔物語集』（平安時代の終わり）と『宇治拾遺物語』（鎌倉時代）が説話集。

問八　イ　（10点）

「ぞ・なむ・や・か→連体形」「こそ→已然形」。イは「ぞ」→連体形「ける」で正しい。

入試にチャレンジ

問一　①ア　②ア　③ウ

会話の中身から、だれのことばかを決める。①②押領使　③「……土大根らに候ふ」と答えて消えた兵二人。

問二　（例）長年食べてきた大根が兵になって、敵を追い返してくれたこと。（二十九字）

「かかる」は前の出来事を指す。採点の要素：①長年食べてきた大根が　②兵になって　③敵を追い返して助けてくれた。

問三　ウ

「〜にこそあらめ」の「あらめ」が省かれている（結びの省略）。「こそ」の結びは已然形。

問四　ウ

最後の「深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ」が筆者の感想。

問五　ア・ウ

『徒然草』は随筆。同じ随筆は『枕草子』と『方丈記』（三大随筆）。

くわしい解き方は創心館出版の攻略テキスト（別冊解答）に載っています。

古文の本文の一部は、やたがらすナビ（https://yatanavi.org/）の次の本文をもとに、表記を改め、一部を省くなどして使っています。
中川聡／Satoshi Nakagawa『徒然草』https://yatanavi.org/text/turezure/index.html（CC BY-SA 4.0）
これを改めた古文の本文（注・問題・解説はふくみません）は、同じCC BY-SA 4.0 で提供します。
CC BY-SA 4.0 の内容：https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja